

―狙われた爆乳仙女―

牝堕隷仙



CV: 秋山はるる／大山チロル

◆トラック 1

【風仙】

「ここが村人たちの言っていた、妖魔が根城にしているという洞窟ね。間違いないわ……酷い淫気が入口にまで漂ってきてる。

確かにこんな状況じゃ、村人たちでは入れないのも道理ね」

*

【風仙】

「ここが……最深部……」

（淫気だけは濃いせいで、霊気で防いでいる私でも少し濡れてきてる……。

ただの人間じゃ、奥に辿りつく前に淫気に狂わされて、盛りのついた性欲猿になるのがオチでしょうね）

【風仙】

「出てきなさい。

アンタたちみたいな雑魚妖魔はさっさと片付けて、こんな陰気な洞窟、さっさと出ていきたいのよ」

【風仙】

「よくもまあ、雑魚妖魔がここまで集まったものね。

これだけいればそこの退魔師じゃ、数を頼りに強引に押し潰せるんでしょう。けど、私にはそんなの通用しないわよ」

【風仙】

「さてと……格の違いを思い知って、まだかかってくる愚か者はいるかしら？」

【少年】

「助けて、お姉ちゃん……」

【風仙】

「っ……！　なんで、こんなところにあんな子が……!？」

大丈夫。すぐに私が助けてあげるから、安心して待っていないさい」

【少年】

「あ、あああああっ！」

【風仙】

「っ!？」

【妖魔】

「くくく。よくぞ我らの住処へとやってきた。

単なる間抜けなのか、あるいは腕によほどの自信があるのか。

どちらにせよ、愚かであることには変わらないな」

【風仙】

（喋ってるのはあの子じゃない……妖魔に寄生されてる。

あの妖魔自体は少し強い程度だけど、寄生された状態で靈氣を流したら、あの子にも悪影響が出る可能性が高い。

雑魚ばかりだと思って油断したせいであの子が……。

解放しなさい、だなんて口で言って聞くような相手じゃない。

こういう下衆を釣るための餌は……あの、目……舐めまわすようないやらしい目。

そう……そういうこと。私の身体が欲しいのね。

あの触手で滅茶苦茶に犯されたら——って、私ったら何を考えてるのよ。

やっぱり淫氣の影響をかなり受けてる。

でも相手は所詮、性欲しか頭にない下衆。それなら——）

「その子を解放しなさい。

もちろんただでは言わないわ。その子を解放するなら、私の身体を味わわせてあげる。

そんな貧相な子供の身体よりも、靈氣に満ちた私の身体の方が良いでしょう？」

（別に……期待してるわけじゃ、ないわ。

仙道を歩むと決めた日から、女は捨てたでしように。

この火照りは、淫氣のせい……生理現象に過ぎないわ）

【風仙】

（やっぱり乗ってきた。このスケベ妖魔。

こんな雑魚妖魔の、触手を受け入れるだなんて屈辱的だけど……）

「んっ……」

（挿^{はい}入って、きたっ……

洞窟に充滿してた淫氣のせいで、こんなのも感じちゃう……）

「私の、心まで……自由にできるだなんて……思っているなら、ん、火傷するわよ」

【妖魔】

「膾肉が絡みついてくるぞ。愛液もたっぷり。

外見のみならず中までなんとスケベな身体だ」

【風仙】

「黙っていれば、調子に乗って……口を、んっ……嚙み、なさい。年端もいかない子の口を使って……下品な言葉を吐かないで」

触手がさらに奥へと挿入され、子宮に届く。

【風仙】

「くぁ、んっ……」

（子宮に、届いてっ……太い先端が、子宮口に、食い込んで、るうっ♡）

奥まで、叩きつけるみたいに、出し入れ、してっ♡

声、出ちゃうっ……駄目よ……あんな妖魔に、弱みなんて、見せられないっ。

でもおっ♡）

「お、んうっ♡」

子宮口に食い込んだ触手から、子宮に何かが送り込まれる。

【風仙】

「んっ♡ はぁ……んうっ……」

（子宮になにか、入れられた？ これは……何かの、呪具……？

どういふものはわからないけど、ロクなものではなさそうね……）

【妖魔】

「その呪具は貴様の子宮と一体化し、貴様を我のしもべへと変える。

いかに優秀な仙女だろうと、それを受け入れた時点で貴様の負けだ。

貴様はもう我のものよ」

【風仙】

（確かに、入れられたこれからすごい邪気を感じる。

あんな雑魚妖魔なんかよりもずっと禍々しい力を。

だけど、どんなに強力な呪具であろうと、この程度の邪気なら――）

【風仙】

「だったら……もう人質はいらない、でしょう」

【妖魔】

「いいだろう。貴様は我に逆らえぬのだからなあ」

【風仙】

「ほら……もう大丈夫だから、こっちにいらっしゃい……」

【少年】

「う、うん……」

【風仙】

（くっ……子宮が、熱い……邪気が流し込まれてる……

私の身体を操ろうとして……っ

だけどっ……この程度の邪気、靈気の膜で覆えば……！）

「――滅！」

【風仙】

「はあっ……くっ……身の程を、弁えなさい。

人質さえ解放されれば……アンタみたいな雑魚妖魔、こうして一撃なんだから。

――なんて、もう聞こえてないでしょうけど。

もう大丈夫だから安心しなさい。

怖い妖魔はやつつけたからね」

【少年】

「すごいやお姉ちゃん！

想像以上だったけど、気を抜くのが早すぎたんじゃない？」

◆トラック2

【風仙】

「え……？」

【風仙】

「んうっ♥ ちょっと、そんなところに指入れちゃっ……んいいっ♥」

（なにつ、これっ♥ 指先から、妖、力……っ!?

マズ……倒したと思って油断したっ……！！）

「はあ、うんっ♥ あ……ん、くうっ♥」

（何でこの子が、邪気をっ……？

それも、さっきの妖魔なんて比にならないほど強いっ……！！）

「あなた、まだ、操られてっ……」

【少年】

「逆だよ。お姉ちゃん。この洞窟の妖魔たちは僕が操ってたんだ。
お姉ちゃんをここにおびき寄せるためにね」

【風仙】

「なっ……」

（嘘でしょう？ 私ともあろう者がどうして今まで気付かなかったの。

この、禍々しい邪気……子供が身に着けられるものなんかじゃない。

妖魔の擬態——じゃない。凄まじい邪気だけど、気配は間違いなく人間。

まさか、んうっ♡）

「指、動かす、んじゃっ♡」

【骸羅】

「お姉ちゃんが僕を放って考え事をしてるみたいだからついね。

僕が何者なのか考えてたんでしょ？ 教えてあげようか？」

【風仙】

「ありえない……けど、他に考えられない。

あの邪法を——転生術を、使ったというの……？」

【少年↓骸羅】

「さすがは今世^{こんせ}最高の仙女と名高い風仙。もうわかつちゃったんだ。

正解。

我が名は骸羅——幾度となく転生を繰り返し今世に降り立った偉大なる神仙さ」

【風仙】

「なっ……骸羅、ですって……」

（信じがたい……けど、この邪気……信じざるを得ないわね。

まさか伝説にまで謳われる邪仙と出会うなんて……だけど……いえ、だからこそ——）

「お前のような邪悪な存在を放置するわけにはいかないわ。

この身にかえても、私がお前を倒してみひゃっ♡ くうっ♡」

【骸羅】

「お姉ちゃんったら怖いなあ。怖くて僕の魔羅が縮み上がっちゃうじゃないか。

雑魚妖魔の邪気じゃあお姉ちゃんの霊気障壁を越えられなかったみたいだけど、僕の邪

気なら——」

【風仙】

「ふぁ、あ、く、ううんっ♥」

（なんて、邪気っ……なに、これっ……さっきの、呪具が子宮に、根を張ってる。
このままじゃ、ダメ……なんとか抵抗、しなくちゃ……！）

【骸羅】

「僕が求めていたのはお姉ちゃんの命じゃなくて、その子宮。」

霊核より生み出される霊気を精錬し、何百、何千倍と増幅させるお姉ちゃんの子宮はらと霊核が欲しいのさ。

だけど気が変わった。その淫猥な肉体と気高い魂——どちらも僕のモノにしたくなった」

【風仙】

「誰が、お前のような邪悪に屈するのですかっ！」

【骸羅】

「へえ。まだ抵抗する霊気ちからが残ってたんだ？

せつかくだし、僕も楽しませてもらおうかな」

【風仙】

「なにをっ……!? くぁ、んっ、はぁっ♥」

【骸羅】

「お姉ちゃんに仕込んだのは淫隸玉いんれいぎよくっていう呪具でね。

牝の子宮に寄生させて、子宮から牝を改造する素敵オモチャな玩具なんだ」

【風仙】

「くっ、は、あっん♥ わた、しは……そんな、ものに、屈したり、なんてっ……」

【骸羅】

「無駄だよ。少しの間くらいは正気を保つ時間が伸びるかもしれないけど、いずれ墮ちるんだから、さっさと諦めて僕の玩具オモチャになりなよ。

素直になれたら好きなだけ可愛がってあげるよ。こういう風にさ」

【風仙】

「んっ♥ はぁっ……こ、のっ……あうんっ♥」

（こいつ、巧いっ……！

アソコの中、指で掻き混ぜられて……くっ、淫気の影響が抜けてないせいで……声が、抑えきれないっ！）

【骸羅】

「淫気のせいなんかにしちゃダメだよ。
お姉ちゃんが淫らな身体をしているだけなんだからね」

【風仙】

(っ……！ 私の、心まで読んでっ……！)

【骸羅】

「普段の落ち着いた状態だったら読み取れなかっただろうけど、頭の中が半分以上桃色に染まった今のお姉ちゃんの心を読むなんて簡単さ。

もちろん、お姉ちゃんが口では嫌がっていても蕩けそうなくらい感じてることも、どこをどうすれば一番感じるのかも、お姉ちゃん以上にわかる。
はやく僕のしもべになるって誓いなよ」

【風仙】

「誰が、アンタのしもべなんかにっ……！ つ……ふいつ、んうっ♡
く、あ、う、ああんっ♡」

(さっきの、呪具が、子宮——卵管に根を張ってっ……！

お腹の奥に染み込んでいって……いやらしいことばかり、頭の中に……♡

お腹に……こないやらしい紋様が浮かび上がって……

なんて、屈辱……！ こんな男に、好き勝手にされるだなんて……)

「はあっ……んっ……はあ……ッ♡ あっ♡ ふう、んうっ♡」

(この子から、漂ってくるオスの匂いに、私の身体が反応してる……

きゅんきゅんって……この子の子種を欲してる♡)

「はあ……はあ……んっ♡ あ、あ……♡」

【骸羅】

「股を開け、牝豚」

【風仙】

「そんなこっ、なっ!? 嘘っ、身体が、勝手にっ……！

股を、開いてっ……くっ……」

(目が、離せない……あいつの、アレ……チンポから、目が、意識が、わずかにさえも逸らせない……ダメ……ダメなのに、子宮が疼く……アレが、チンポが、欲しい……違う……ダメよ。こんなやつに、屈するなんて……絶対……！ ごくっ……)

【骸羅】

「コレが欲しいんでしょ？ 一言、欲しいって言えさえすれば、すぐにぶちこんであげるよ」

【風仙】

「誰、がっ……アンタみたいな下衆に、屈する、もんですか。」

「はあ、ん……そんな、粗末な、モノで、この私を、満足させられるとでも思ってるの？」

（あ、ああ……♥ 欲しい……コイツの、チンポ、欲しい……♥

違うっ……私はこんなの、欲しくなんてっ……）

【骸羅】

「淫乱仙女サマには物足りなかったかな？」

「だったら、ご希望通り、僕本来の魔羅で相手してあげるよ」

【風仙】

「ひあっ♥ ああうんっ♥」

（なっ……コイツのチンポ、急に大きく、なって……さっきまでとは、別物♥

大きくなったコイツのが、私のアソコに押しつけられてっ……硬い、熱い……♥ こんな

なの、こんなのアソコに押し当てられたら……ダメよ……。

もうずっと昔。仙女として生きることを決めてから、女としての人並みの幸せなんて捨て

てきたはず。性行為なんてもうどれだけしていないかもわからない。そんな欲求、捨て

去ったはずなのに……欲しい……子宮、疼いて、欲しくなる……この、このチンポのこと

欲しくて仕方なくなる……こんなの、挿入^いれられたら……。

ダメなのに、想像しちゃう。このぶっといチンポで、アソコの中をぐちゃぐちゃに掻き

混ぜられること……ぜったい、そんなの絶対、気持ちいいに決まってるじゃない……♥

でも、ダメ……そんな、そんなの……）

【骸羅】

「ずいぶん葛藤してるみたいだけど、マン汁だらだら溢れさせながらじゃ格好つかないよ。

それに、そんなスケベな姿を見せられたら、僕ももう我慢の限界でね」

【風仙】

「なっ……！ やっ、やめっ——」

【鳳仙】

「んひいつ♡おつ、ぐ、いいつ♡」

(ぶつとい、チンポ、挿入って、キたっ♡

にやに、こりえつ♡

硬くてっ♡
熱くてっ♡
ぶっ、
といいっ♡)

【骸羅】

「うわあ、すごい名器だ。今まで食ってきた女の中でも間違いない一番だよ」

【鳳仙】

「く、はあ、んっ♡ いひいつ♡」

(私の腔内、
ナカ 拡張ひろられて、
往復、
してるうつ
♡

ダメっ……こんな、こんな気持ちいいままじゃ、靈気を集中、できないっ♥

コイツの、チンポっ♥ 私の、気持ちいいところ的確に責めてくるっ♥

あ、があっ♡ 呪具が、また成長、してっ♡ 卵巣が、作り替えられているというの？

このままじゃ、ダメっ……なんとか、障壁を……張り直さないとっ♥

子種には靈氣や邪氣を込めやすい……こんな状態で、コイツの邪氣を、子宮に直接受け
たりなんて、したら……（♥）

【骸羅】

「余計なことなんて考えるのはやめて、僕のチンポに集中しな、よっ！」

【風仙】

「ちよっ♡ 急に動く、にゃんっ♡ んひいっ♡ おっ♡ ほおおっ♡

アソコの深いところまで、太いのでほじくら、れるうっ♡

わたっ、わらひはっ♡ 負け、にゃひっ♡

アンタ、にゃんか、にひいっ♡ おっ♡ ほおおっ♡」

(コイツの、性器っ、子宮口、叩いてるっ♡ コンコンッって♡ そのたびにっ♡

気持ちよくて、仕方ないっ♡ 頭、真っ白にっ♡ コイツに屈服したいって、思っちゃうっ♡)

「んひいっ♡ おっ♡ ほおおっ♡ んぐうっ♡」

(コイツのっ、大きっ♡ すぎるうっ♡ お腹、内側から突き上げられてっ♡

いやらしい音、頭に、響くっ♡ ダメっ♡ 気を緩めたら、流されるっ♡

ああっ♡ すごっ♡ 女を、モノみたいに思ってる、氣遣いのない抽送っ♡

最低、なのにつ♡ しゅごっ♡ きもち、よしゅぎるっ♡

コイツの、ぶつといちんぽ、よすぎるのおっ♡

亀頭が、子宮口、こじあけてえっ♡ 子宮に、届くうっ♡

らめえっ♡ おまんこっ♡ 勝手に、抱き締めちゃうっ♡ コイツのちんぽに、恋しち

やってえっ♡ 出し入れされると♡ 幸せな気持ちになるのっ♡ 止められないいつ♡

あっ♡ ああっ♡ あああっ♡ クるっ♡ チンポビクビクってしてっ♡

根元の方からこみあげてきてるのわかるっ♡

マズいわっ♡ そんなの、そんなの気持ちいいに決まってる♡

身体が、子宮が、私の本能が、期待してる。しちゃってるっ♡

くるっ♡ クるっ♡ キちゃうっ♡ 射精くるっ♡)

【骸羅】

「ほら、たっぷり味わえ、牝豚ッ！」

【風仙】

「あっ♡ あっ♡ ああああああああんっ♡

奥に、射精^でてっ♡ 熱いの、注がれてるううっ♡

なんて邪氣っ♡ これ、マズ、いっ♡ 靈氣が、打ち消されるっ♡

抵抗、しなきゃいけにゃいのに♡ だめえ♡ 受け入れ、そうになっちゃう♡

だって、らって♡ これ、こんなに、気持ちいいんだもの♡)

「あひっ♡ んっ♡ ひい……♡ はあ……♡ はあ……♡ はあ、うんっ……♡」

【骸羅】

「まだまだ終わ리じゃないよ。

折角の千年に一度の上玉なんだ。

この程度でバテたり堕ちたりなんてしないでほしいな」

【風仙】

「んひいいっ♥ カリ首、引っ掛かって♥ 抜けっ♥ んあっ♥ んひいいいいっ♥

はあ……はあ……はあ……」

【骸羅】

「ほら、そこで脚を開いてみせろ」

【風仙】

「あ、く、うっ……は、いいっ……」

（あ、あ……すご、い……♥ さっき私の膣^{ナカ}にあればど射精したばかりなのに、まるで萎える様子がない……♥ カリ首も反り返って、血管もあんなに浮かび上がって……なんて、遅いチンポなの……♥）

「はあ……♥ はあ……♥ はあ……♥ ごくっ……♥」

◆トラック3

【骸羅】

「そんなに物欲しそうな目で見なくなっただけですぐにまたあげるよ」

【風仙】

「ちがっ……物欲しそうな目なんて、してなんああっ♥

また挿^{はい}入って、きっ♥ はあっ♥ ふうんっ♥」

（私の、身体あ、さっきより、敏感になってる♥

コイツの、チンポのかたち、はつきり、わかっちゃう♥

この体位だっ♥ 体重、乗ってっ♥ さっきより深く挿^さ入さるっ♥）

「あっ、おっ♥ おおおんっ♥ ほおっ♥ ひううっ♥ 一気に、奥まれえっ♥」

（突かれる、たびにっ♥ 膣^{ナカ}内が、コイツの、チンポのカタチにされるうっ♥

頭の、中まで、チンポ、突っ込まれてるみたいれっ♥ おかひく、なりゅっ♥）

【骸羅】

「まだ靈気が残ってるみたいだね。

僕の邪気で染め上げてあげるためには、それも搾り出してあげないと」

【風仙】

(コイツ、今度は私の胸をつ！)

ダメっ、それは、ダメっ……内側から張ってて、切なくてっ……今刺激されたら……)

「やめっ♥ 胸、触っちゃっ♥

んひっ♥ おっ♥ ほおっ♥ おおおっツ♥

なん、なんれっ♥ 妊娠、してないによにつ♥ 母乳っ♥ 出てえっ!？」

【骸羅】

「お姉ちゃんの霊気を母乳に変換して排出させてあげてるんだ。

清浄な霊気が残っていたら、僕の邪気で染め上げる邪魔になるだけだからね」

【風仙】

(んひっ♥ ザラつとした、舌が、硬くなった乳首を撫でてくるっ♥

甘噛みされて、中から気持ちいいのが弾けちゃいそうっ♥)

「やめっ♥ おっぱい、吸いつかないでっ♥

く、はあっ♥ ふう、んううっ♥

ら、めえっ♥ おっぱい、これ、以上うっ♥

いひっ♥ おっ♥ ほおっ♥ ひっ♥ ほおおっ♥」

【風仙】

「んっ♥ ひぎいっ♥ ひぐうっ♥ やめっ♥ ら、めえっ♥

ちくびいっ♥ 噛むのらめえっ♥ 吸しゅわれて、敏感になつてりゅ、かりやあっ♥

んひっ♥ おっ♥ おおおっ♥ りやめっ♥ イクっ♥ イクウウウウンッ♥」

【風仙】

「はあ……はあ……♥ はあ……♥」

(マズ、い……邪気に全部、打ち消されて、もうほとんど霊気が、ない……

これ以上、コイツの邪気を注がれたら、私……。

嘘、でしょ？ コイツのチンポ♥ さっきより、勃起してっ……♥)

【骸羅】

「それじゃあ、せいぜい無駄な抵抗でもしてね、っと！」

【鳳仙】

「ふぎっ♥ はあっ♥ ぐっ♥ んひっ♥ んほおっ♥」

（気持ち、よすぎるうっ♥

こっ、こんなの、味わい続けていたら戻れなくなるっ。

コイツの言うとおり、屈するっ♥ チンポに屈服させられるうっ♥

子宮が、コイツに、このチンポに屈したがつてるのおっ♥）

【骸羅】

「もっと気持ちよくなりたいでしょ？」

だったら！ 僕のモノになるって言いなよ！

そうしたらもっと！ もおっと、気が狂うまでヨガらせてあげるよ！」

【鳳仙】

「あ、ああ……ああ……♥」

（ダメ。

ダメ。

ダメよ。

それは、それだけは言っちゃダメ。

心を読まれているとしても、この葛藤すらお見通しだとわかっていても、一度でも口に

したら、今度こそもう戻れない。

戻ろうなんて思わない、思えなくなる。

だけど——いつまで我慢するの？

我慢していれば逆転できるとでもいうの？

逆転の秘策を練ろうとする思考さえも読む相手に、どうやって？

違う……こんな、弱気なこと考えちゃ——）

【骸羅】

「我慢したってつらい時間が長引くだけだ。

受け入れればもっと——ずっと気持ちよくしてあげるよ」

【鳳仙】

（あ、ああっ♥

邪気に打ち消されて、おっぱいから搾り取られてえ♥ もう靈氣が、ないっ♥

邪気を打ち消すための障壁も張れない。

さっきの、射精……すごかった……

私の靈氣のほとんどが打ち消されて……

コイツの睨丸にアレと同じ。いえ、もっとずっと邪悪な邪氣が集まってる。

はあ、はあ……はあ……ああっ♥）

【風仙】

「んひっ♡ 動き、激しっ♡ いいっ♡ しゅご、いひっ♡
内臓ごと、私の、中、全部、掻き混ぜられるみたいっ♡
きもちいいこと、チンポのことしか、考えられないっ♡」

【骸羅】

「そうだ。それでいい。牝らしく貪欲に快楽を求めろ。
お姉ちゃんが求めるほど、僕の邪気は染み込みやすくなる」

【風仙】

「んあっ♡ はああっ♡ まだ、激しく、にやるのっ♡
あ、ああああっ♡ コイツの、チンポっ♡ ビクビクって、いつてっ♡
あっ♡ 射精る♡ 射精^だされるっ♡ あっ♡ あっ♡ ああああっ♡
射精^キたああああんっ♡
イクッ♡ イクイクイクウウウウウウッ♡
あ、はあっ♡ すごっ、すご、いいっ♡
あついっ♡ 溶岩みたいな、邪精いっ♡ 子宮満たしてるっ♡
焼けるっ♡ 融けるっ♡ 気持ちいいっ♡
もっと、もっと邪精を注がりたい♡
コイツに染められたいっておねだりしちゃってる♡
頭の、中あ、真っ白、にいっ♡
はあ……♡ はあ……♡ はあ、んっ……♡」

【骸羅】

「ふふ……僕の邪精の味はどうだったかな。なんて、聞くまでもなさそうだね」

【風仙】

「く、ん♡ あ、はあ♡ あ、ああ♡」

【骸羅】

「これ以上の快楽が欲しくない？」

【風仙】

「はあ……♡ んっ♡ いっ♡ これ、いじょうの……かい、らく……？
まだ、このさきが……あると、いうの……？」
（だめ……そんなこと、考えちゃダメなのに……まだ、あるの？
まだ、もっと、もっと——気持ちよく、なれるの？ なれて、しまいの……？）

【骸羅】

「ねえ、お姉ちゃん。お姉ちゃんの霊核を、僕にちょうだい」

【風仙】

「そ、れは……」

（霊核は霊気の源……それをコイツに差し出したら、私は神仙ではなく、ただの人に戻る。かろうじてコイツの邪気を防いでいる霊気まで失ったら、私は——）

【骸羅】

「霊核は神仙にとって、最も重要な器官だ。最も敏感といってもいい。そんな霊核を直接犯されたら——どれだけ気持ちいいんだろうね？」（※囁くように）

【風仙】

「ごくっ……♡」

（そんなの、そんなの絶対、気持ちいいに決まってる……♡

らめえっ♡ らめ、なのにつ♡ 身体が、霊核が、コイツに、邪気に染められるの期待してるっ♡ あっ♡ ああっ、ああっ♡ 霊核、卵子っ排出、しちゃううっ♡）

【骸羅】

「いい子だ」

【風仙】

「あっ♡ あああああっ♡

霊核、犯されてっ♡ るのにいつ♡ こんな、気持ちいい、なんてっ♡

プチプチ、って♡ 邪精が、無防備な霊核を犯してるの、わかるっ♡

霊核が邪気に、染められるう♡

私という存在の根幹が、塗り替えられていくっ♡

これまで霊気を増幅してた霊核が、邪気を増幅してるのがわかる♡

私の子宮の中で、邪気が爆発的に膨れ上がってっ♡

自分の意思じゃ止められない♡

いいえ、今の私にはこれを止めようという意思すら湧き上がらない♡

あ、ああ♡ ああああっ♡

湧き上がってくるう♡

邪悪な意思♡ 悪辣な欲望♡ まるで骸羅の悪意そのものを注ぎ込まれているみたい♡

正義も倫理も価値観も全部が裏返る♡ だけどそれが嫌じゃない♡ 心地良い♡ 天に

も昇るような気持ちなのっ♡」

【骸羅】

「霊核を犯される快感は格別だろう？」

【風仙】

「ああ、ああっ♡ しゅごっ♡ こんにゃっ♡ こんにゃにいつ♡
霊核犯されりゅのっ♡ 良すぎりゅっ♡ イクッ♡ イクウツ♡
でもしょうがないじゃない♡ だってこんなに気持ちいいの♡ 抗えるわけない♡
イッてるのにな♡ またイクっ♡
子宮もっ♡ おまんこもっ♡ 霊核もっ♡ ぜんぶでイクウツ♡
あひっ♡ おっ♡ ほおおっ♡ んいいいっ♡ ほおおっ♡
んひっ♡ はあっ♡ うんっ♡ いひいっ♡ は、ああ……♡」

【骸羅】

「さて、それじゃあ——ひり、出せ、」

【風仙】

「あ……ああ……♡ は、い……♡
んっ♡ くっ♡ はあ、はあっ♡ ふう、んううっ♡
あっ♡ おまんこ降りてくるっ♡ 出るっ♡ 出てくるっ♡
イクっ♡ イクイクイクウウウウウウツ♡」

きゅぽんっ、という音を立てて膣から生み出された魔晶を骸羅が手に取る。

【風仙】

「はあ……♡ んひい♡ あっ♡ ああ……♡」

【骸羅】

「今世最高の女仙の霊核を核に、この僕の邪精をお姉ちゃんの子宮で増幅して生まれた邪
気の結晶——邪霊晶、とでもするべきかな。

素晴らしい純度の邪気だ。期待以上の出来だよ。
これさえあれば、僕は仙尊かみにすら至れる」

【風仙】

「ああ♥ はあ……♥ はあ……♥ はあ……っ♥」

（これ、しゅご、いいっ♥ 息、するだけで、気持ち、いい♥

ああ……♥ 霊核を失った、卵巣に♥ 邪気が、湧いてくる♥

コイツの、邪気で、染められて♥ 私の子宮♥ 妖魔の子宮に、なったの♥

霊核——ううん♥ 魔核から、湧き出す、邪気があ♥ 身体に、広がっていく♥

ああ♥ イイ♥ これ、気持ち、イイ♥ 身体が、人間を辞めていってる♥）

【骸羅】

「ふふふ。お姉ちゃんの身体、面白いことになってるみたいだね。

邪霊晶を生み出してくれたお礼に、手伝ってあげるよ」

【風仙】

「あひっ♥ んっ♥ あ、あああっ♥ 魔核から、邪気流れ込んで、くりゅっ♥

あはあっ♥ さっき、よりっ♥ しゅご、ひいっ♥

わたひが、塗り潰されるっ♥ 子宮の奥から、邪悪な感情ばかりいっ♥

心、染まるっ♥ ああ、んうっ♥ イイっ♥ イイのおっ♥

んひいっ♥ イクッ♥ イクイクッ♥ イクウウウウウッ♥」

【風仙】

「あ……♥ はあ……♥ はあ……♥」

（ああ……素敵♥ 力が、邪気が、漲る……♥

なんて、邪悪な力……霊気とは全然違う♥ これが、邪気……ああ、私、妖魔にい♥

息をするだけで、気持ちいいっ♥ 心臓が脈打っただけで、イッちゃいそう♥

あんなに穢らしいと思っていたのに……こんなに気持ちいいなんてえ♥）

【骸羅】

「どうやら成功したみたいだね。

気分はどうだい？ お姉ちゃん」

【風仙】

「ええ……最高の気分♥ んふっ♥」

【骸羅】

「僕みたいな邪悪な存在には屈しないんじゃないのかい？」

【風仙】

「らってえ♥ こんな、知らなかったんだもの♥

ああ……あなたのチンポ、まだまだ元気ね♥」

◆トラック4

【骸羅】

「まったく、転生したばかりだというのに、もうチンポが欲しくてたまらないの？」

【風仙】

「さっきまでの前菜——この身体なら、あなたのこの逞しいチンポをもっと強く、激しく感じられるんでしょう？」

こう、して……ああんっ♥ おっぱいに、ぶつといチンポの熱、伝わってくるう♥」

【風仙】

「あむっ♥ んっ、ちゅっ♥ はあっ♥ 素敵い♥

ああ……これが、私を転生^かさせたチンポっ♥

なんて、雄々しいの♥

んむっ♥ ちゅるっ♥ れろっ♥ はあんっ♥」

(ああ♥ すごい邪気♥

溢れてくる先走り舐めてるだけなのに、どんどん力が湧いてくる♥

邪気を、子宮が増幅してるのね♥

人間なんかだったときの何倍も力が全身に満ちて、なんだってできる気がするわ♥

たとえば——コイツを倒す、なんてことだって♥

そうよ……今の私ならできる♥ コイツの邪気を吸って、増幅すれば♥

減ぼすなんて勿体ないわ♥

自分の優位を疑いもしないこの子を、私の飼い犬にしましょう♥

いつだって、私が欲しいときにガチガチチンポを差し出す、従順で可愛いわんわん♥

ああ♥ 素敵♥)

「はむっ♥ んうっ♥ じゅるっ♥ ちゅぱっ♥ はあ、んっ♥

ろう、かひらあ？ きもひ、いひ？」

【骸羅】

「ああ。極上の乳マンコに口マンコだ。

あの気丈な仙女がこうも淫らに堕ちるとはね。

そろそろ射精^だすよ」

【風仙】
「あっ♡ はあっ♡ くだひやいつ♡ セーえきっ♡
じゅるっ♡ れろっ♡ じゅるるるるううっ♡」

【風仙】
「んむっ♡ こくっ♡ こくっ♡」
（すごい♡ 全然衰えないっ♡ ドロッド口の邪気入り精液、すごい量っ♡
飲んでも、飲んでも、まだ射精^でてるうっ♡
精液で、溺れ、そうっ♡ ああ♡ しゅごいいっ♡ もっと、もっとおっ♡）
「ごくっ♡ こくっ♡ こくっ♡ はあ♡ ああ♡ あはあ♡ ああ……♡」
（すごい、臭い♡ 頭の、中身♡ 全部、精液の臭い^{にお}になるう♡）

【骸羅】
「来なよ。上だけじゃなくて、下の口でも僕のチンポが欲しいんだろ？」

【風仙】
「ええ……もちろん♡」

【風仙】
「んふっ♡ 美味しそうなチンポ……♡ ああ……すごい♡
あんなに射精^だして、私の胃袋、たぶたぷになってるのにい♡」
（私のおまんこで、虜^だにしてあげる……♡）

【骸羅】
「ねえ——」

【風仙】
「んっ♡ どう、したの？」

【骸羅】
「あまり調子に乗るなよ。牝豚」

【風仙】
「ふえ……？」
あっ♡ はあっ♡ ああんうっ♡ 一気にっ♡ 挿入^{はい}って♡ きたあっ♡
（なに、これっ♡ さっきまでと全然違ううっ♡
おまんこっ♡ チンポに吸いついてっ♡ 媚びるのっ♡ 止められないっ♡
身体がっ♡ 勝手に♡ 屈服、してるうっ♡ なんれえっ♡）

【骸羅】

「しもべが御主人様に媚びるのは当たり前だろう？
まさかお姉ちゃんの浅はかな叛意に僕が気付かないとでも思ったの？」

【風仙】

「あっ♥ はああっ♥

子宮の、中の、邪気がっ♥ 吸われるっ♥ チンポに、吸われるっ♥
力が、抜けるっ♥ のにいつ♥ 気持ちいつ♥ チンポ、いいのおっ♥
あ、ふ、んあああっ♥

（わかるっ♥ わかっちゃうっ♥

私の身体は♥ 心はっ♥ コイツに——この方に、逆らえないようになってるうっ♥
ああっ♥ すご、いつ♥

わたしの、おまんこっ♥ このチンポのかたちに、あつらえられた、みたいっ♥
びったりっ♥ 吸いつくっ♥

チンポで貫かれるたびに♥ 注がれた邪気が♥ 芽吹いていく♥

ああっ♥ あああっ♥ 私、私はあっ♥

この方に逆らおうなんてっ♥ 間違ってたあっ♥

私は、この方の、しもべっ♥

ああ……そう♥ そうよ♥ この方こそ、私の、永遠の、御主人様あ♥）

【骸羅】

「自分の立場を理解できたかな？ お姉ちゃん」

【風仙】

「あ、ああ……♥ はいっ♥ わかり、ましたあっ♥ あんっ♥

御主人様に刃向かうなどっ♥ 愚かな叛意を抱いてっ♥ 申し訳ありませんっ♥

わたひっ♥ わたひはあっ♥ 骸羅様の♥ んひいつ♥ 御主人様のしもべっ♥

都合の良い♥ 淫らで、邪悪な、牝肉奴隷でございますっ♥

お好きなきにっ♥ お好きなように♥ あなた様専用のこの身体、お使いください♥」

【骸羅】

「最初からそう言っておけばいいんだよ。

それじゃ早速、誓いの口づけでもしてもらおうかな」

【風仙】

「はいいつ♥ よろこんれえ♥ あむっ♥ ちゅっ♥」

【風仙】

「じゅるっ♡ れろっ♡ はあっ♡ んむっ♡
御主人様のよだれえ♡ おいひいれじゅるっ♡ はあっ♡ んうっ♡
はあ……♡ はあ……♡ はあ……♡ 邪気が、流れ込んで、こない♡
でもお、ぜんぜん、かまわない♡
ああっ♡ 邪気が、舌に♡ 紋を描いて♡ じゅるるっ♡
イツ♡ イクッ♡ イクウウウウウッ♡
ああ……♡ 舌にも、御主人様のしもべの、証♡ 素敵♡」

【風仙】

「んひいっ♡ お口でイッたばかり♡ なのにいっ♡
おまんこっ♡ ごりごりっ♡ 良ひいっ♡ もっと♡ もっとおっ♡
わたしの♡ 御主人様の従順なしもべの身体を♡ ご堪能ください♡」

【風仙】

「んぐいひいひいひいひい♡
ちよっ♡ んいっ♡ おっぱいっ♡ 指挿^いれちゃめえっ♡
あひっ♡ おふうんっ♡ ごめっ♡ なひゃいっ♡
おっぱいも♡ おまんこもおっ♡ ぜんぶっ♡ 御主人様の、ものです♡
しゅきなときに♡ しゅきなように♡ 使っ♡ くだひゃい♡
しゅごおっ♡ それ♡ よしゅぎる♡ おまんこ♡ おっぱい♡
両方、よしゅぎて♡ おかしくなるううっ♡
んおおおおおおっ♡
わたしのっおっぱいっ♡ 奥までっ♡ 性感帯に、なってるうっ♡
んひっ♡ おっ♡ ほおっ♡ おおおんっ♡
んいっ♡ イクッ♡ イクッ♡ おっぱいでイクウウッ♡
あひっ♡ おおっ♡ んひいっ♡ 御主人様あ♡ 子種っ♡
わたしの♡ 牝豚の子宮に♡ 子種注いでえっ♡」

【骸羅】

「いいだろう。そら、僕の子種を受け取るがいい！」

【風仙】

「んひいいいつ♡ おっ♡ ほおっ♡ でてりゅっ♡

ああっ♡ 射精^でてっ♡ 射精^でてるうっ♡

御主人様の子種えっ♡ 子宮に、ドクドク注がれてりゅうっ♡

あひっ♡ しゅごっ♡

改造された、子宮がっ♡ 卵子、作ってっ♡ 犯されてりゅっ♡

わかるっ♡ 受精、してるっ♡ いいっ♡ こりえっ♡ 受精好^しゆきいつ♡

ああっ♡ イクッ♡ またイクッ♡ イクイクイクウウウウウッ♡」

【風仙】

「ふい……♡ はあ……♡ はあ……♡ ああ……♡

わか、りゆう♡ 卵子、犯され、てえ♡ 孕み、ましたあ♡

ああん♡ 子宮が、御主人様の邪気を、増幅して、成長、してるう♡

子宮の、中からあ♡ わたしのこと♡ 犯してるのお♡

はあっ……♡ んっ♡ ふうっ♡ はあ♡ はあっ……♡

すご、いい……♡

こんな、しあわせなことがあ♡ このよに、あった、にゃんてえ……♡」

【骸羅】

「お姉ちゃんには、僕が世界を支配するため、手駒となる妖魔を産み落としてもらうよ。

子宮が空になる暇もないくらい孕ませ続けてあげるから覚悟してね」

【風仙】

「はい……♡ 御主人様あ♡」

*

【風仙】

「私は仙女風仙——改め、墮淫^{だいにめせん}牝^め仙、風仙♡

偉大なる仙尊、骸羅様の従順にして淫^いらなしもべ♡

ふふっ……あなたも、御主人様の野望のための糧となりなさい♡」